



藤原 孟 議員
(緑政会)

問

2007年カナダの学校で起きたいじめに対して同級生がピンクの物を身につけて登校し、いじめは絶対に許さないという思いを発信した。このことをきっかけに生徒に対するいじめはなくなつた。現在の運動は、米国、英国や日本など世界75カ国に広がりを見せており、帯広、十勝でもいじめをなくすために「ピンクシヤツデー」の取り組みが広がり始めている。いじめのない社会をつくるため、ピンクのシヤツや小物を身につける行動を取ることが言葉でいわなくても、いじめている側に一人でもいじめに反対しているぞという意思を示す行動宣言になると考え、伺う。

- (1) 白人小学校児童会における取り組み状況と今後の支援策について。
- (2) 帯広、十勝における取り組みの広がりについて。
- (3) TV番組のいじめをノックアウト、めざせ100万人、行動宣言と連動した取り組みについて。
- (4) 2月の最終水曜日を「ピンクシヤツデー」とする考えについて。

問 いじめをノックアウト、行動宣言に「ピンクシヤツデー」を
答 「町いじめ防止基本方針」を策定し、いじめ防止を実効的に行う組織を新設する

「町いじめ防止基本方針」を策定し、いじめ防止を実効的に行う組織を新設する

教育長(1)

白人小学校の平成24年度後期児童会は、12月から毎週水曜日朝にいじめ防止を書いたのぼりを立てて啓発運動を行っていたが、その後、ピンクシヤツデーに参加することを決め、平成25年2月の最終水曜日にピンクのシヤツを着るか、シヤツがない児童はピンク色のリボンや小物を身につけて登校し、「いじめのない学校にすること」を呼びかけ合う運動を行った。引き続き平成26年2月にも実施され、白人小学校の教育目標の一つである「思いやりのある子どもの育成」を目標に、現在も児童会役員が継続事業として行っているとのことである。

このような「子どもたちの自主的な活動」については、特色ある学校運営の一つとして見守っていきたく考えている。

「ピンクシヤツデー」を十勝から北海道に広めようと、帯広市内の高校生、父母、教師など、当該

運動の賛同者が中心となり実行委員会を立ち上げ、合わせて帯広市PTA連合会などの後援を得ながら、昨年2月27日に帯広市とかちプラザにおいて、道内初となる「ピンクシヤツデーとかち」が約200人の参加を得て開催された。その後、同年10月27日には「ピンクシヤツデーとかちinしかお」が、本年2月16日には、「ピンクシヤツデーとかちinめむろ」が開催されている。

「いじめをノックアウト」や「100万人の行動宣言」と連動した取り組みおよび「ピンクシヤツデー」については、白人小学校において児童自らの意思により運動を行っているように、学校や地域の特徴を反映したさまざまな取り組みの態様があるものと認識しており、町としては、学校独自の取り組みとして尊重していきたく考えている。

なお、本町においては、町児童生徒健全育成協議会が「いじめ防止啓発標語」を募集し、その優秀

作品を公共施設等に掲示し啓発を図っているほか、各小中学校では、「学校いじめ防止基本方針」を策定するとともに、「いじめの防止等の対策のための組織」を設置し、地域、関係機関等との連携のもと、いじめ根絶に向けた取り組みを実践している。

再質問 「ピンクシヤツデー」について、沖田教育委員長に見解を伺う。

答 各学校の活動に関しては、その学校に任せるのが本来だと思っており、ご紹介して、各学校がそれに取り組みたいというのであれば、教育委員会としても支援をしたい。

「ピンクのシャツであふれたら」
ピンクシヤツデーとかちテーマ曲
いったい誰に 伝えればいいの
こころ震えて ひとり眠れない
やっぱり誰にも 心配かけたくないし
このまま雪の中 消えてしまえばいい
あなたを絶対守る そんな声が
私の胸に届いた 気がして
こんなにも ほら 心の色があふれてる
こんなにも ほら 心の色で輝いている
ピンクのシャツで この街があふれたら
一緒に さあ 勇気を出して 歩き出せる